

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：34434

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01274

研究課題名（和文）日本語ライティングにおけるナラティブのGood Writing探究と評価法の開発

研究課題名（英文）Development of Narrative Good Writing Search and Evaluation Method in Japanese Writing

研究代表者

坪根 由香里（Tsubone, Yukari）

大阪観光大学・観光学部・教授

研究者番号：80327733

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本語ライティング評価の中でナラティブ作文を対象とし、ナラティブ作文のgood writing探究、および評価基準・評価用フローチャート（FC）等の開発によって教師支援を行うことを目的とした。日本の大学で教える日本語母語話者教師、ならびにインドネシア、タイ、ベトナムの大学で教える日本語母語話者・非母語話者教師による作文評価結果から、ナラティブ作文のgood writing、および評価時の重視項目について明らかにした。また、評価時の優先順位を検討してナラティブ作文の評価用FCを作成し、FC点数別サンプル、評価基準とともにウェブサイトで公開した。さらにFCを使った教師セミナーも実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、日本語ライティング評価においてこれまで研究されてこなかったナラティブ作文を対象に、good writingを探究し、評価基準・評価用フローチャート（FC）等を開発して公開した。この成果からは学習者がより良いナラティブ作文を書くための示唆が得られた。については、評価基準だけでなく各評価項目を説明に沿って見ていくFCを用いることで、作文評価に不慣れな教師も適切に評価ができ、複数の教師で作文を評価する場合は、評価のズレを小さくできると考える。また、FCの点数別サンプルには解説も付けられており、各段階の問題点の把握に役立つであろう。以上より、本研究は教師支援として意義があると言える。

研究成果の概要（英文）：This research aims to explore good writing in Japanese narrative compositions and provide teacher support through the development of evaluation criteria and flowcharts (FCs) for assessment.

Drawing from assessments conducted by Japanese native teachers at universities in Japan, as well as both Japanese native and non-native teachers at universities in Indonesia, Thailand, and Vietnam, we clarified aspects of good writing in narrative compositions and the evaluation criteria emphasized during assessment. Additionally, we developed FCs for assessing narrative compositions, considering the priority order during assessment. These were published on the website alongside evaluation criteria and sample compositions for each FC score. Furthermore, we conducted teacher seminars utilizing these FCs.

研究分野：日本語教育学

キーワード：ナラティブ作文 good writing ライティング評価 評価基準 ルーブリック フローチャート 点数別サンプル 支援ツール

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

近年、留学生が増加の一途を辿る中、日本語の運用力向上も求められることから、その評価観点や評価基準等の構築は重要な課題である。第二言語としての日本語のライティング研究は、これまで論証型の作文を中心に行われてきた。論証型の作文の評価基準、評価方法に関しては、田中他(2009)において「マルチプルトレイト評価基準」が開発され、田中・阿部(2014)には「Good writingのための評価基準」「Good writingの構成要素」が掲載されている。また、「日本語ライティング評価の支援ツール開発：「人間」と「機械」による評価の統合的活用」(基盤(B) 2014-2018年度、代表：田中真理、研究分担者：坪根由香里・影山陽子)では、ライティング評価用のフローチャート(FC)(ホリスティック評価、マルチプルトレイト評価：内容、構成、日本語の計4種類)の開発、ライティングを4レベルで判定するオンラインの自動評価システムの開発、レベル別サンプルの公開、レベル別サンプル、FCを使ったライティング評価ワークショップを行っている。FCとは、ライティングを評価する際の各要素の優先順位(階層性)を決め、段階的に評価していく方法(田中他2018)のことで、FCでは見るべき項目、順序が固定され、短時間で評価でき、評価者間および一人の評価者内の評価のずれが少なくなるという利点があるとの考えから開発された。また、レベル別サンプルには解説が付いているため、FCの各段階において、どのような問題点があるかが理解でき、日本国内のみならず、海外の日本語教師に対する支援としても効果的である。はウェブサイトにおいて公開されている。このように、論証型作文の評価に関しては、様々な支援ツールが開発されているが、ナラティブ作文に関するライティング評価研究は管見の限り見当たらなかった。

世界の日本語学習者数の現状に目を転じると、東アジアでは大幅に減少しているのに対し、東南アジアは増加しており、研究開始当初の日本語教育機関数は、東南アジア地域全体で13.0%増になったという(国際交流基金2017)。東南アジアの学習者は今後も増加すると予想されるため、東南アジアは研究対象として無視できない地域と考えた。

このような中で、本研究では、論証型作文のgood writingと評価に関する先行研究の手法を踏襲し、東南アジア(インドネシア：日本語学習者数第2位、タイ：同第6位、ベトナム：同8位)および日本の大学で日本語を教える教師を対象に、ライティング評価研究においてほぼ手つかずの状況だったナラティブ作文のgood writingを探究し、評価基準・ループリック、および評価用FCを開発することによって、教師用支援ツールを開発することとした。

### 2. 研究の目的

本研究は、日本語ライティング評価においてナラティブ作文を研究対象とし、ナラティブ作文のgood writingの探究、および、評価基準・評価用FC等の評価法の開発によって教師支援を行うことを目的としたものである。

日本の大学で教える日本語母語話者教師、ならびに東南アジア(インドネシア、タイ、ベトナム)の大学で教える日本語母語話者教師(NT)・非母語話者教師(NNT)による作文評価結果から、ナラティブ作文の評価の際に重視する項目、およびナラティブ作文のgood writingについて明らかにしたうえで、ナラティブ作文用の評価基準・ループリックと評価用FCを開発、FC点数別サンプルとともにウェブサイトで公開し、教師支援を行うことを目指す。

### 3. 研究の方法

本研究は以下の方法で実施した。

#### (1) ナラティブ作文の収集

・オンラインにより、調査の対象国である東南アジアの大学で日本語を学ぶ初級修了以上の日本語学習者が、「困難・大変だったこと」「忘れられない出来事」という2種類の課題文(プロンプト)で書いたナラティブ作文を収集した。学習者の日本語能力を測るためにSPOTの受験も課した。比較群として日本語母語話者とハンガリーの日本語学習者からも収集した。

#### (2) ナラティブ作文用評価基準・ループリック原案作成

・日本語のナラティブ・ディスコース研究、日本語の論証型作文の評価基準、英語のナラティブ作文評価基準を参考に、評価基準・ループリックの原案を作成した。

#### (3) 予備調査：日本の大学で教える日本語母語話者教師に対する調査

・上記東南アジアの作文データおよび田中真理氏代表の科研によるEU-Dataから予備調査で用いている作文10編(テーマ「忘れられない出来事」、600字~800字)を抽出し、日本の大学で日

本語の作文指導をしている NT20 名を対象に、以下の 3 つの調査をオンライン (Google フォーム) および E メール添付 (Excel) によって行った。

調査 1: 各自の基準で、1 点 (かなり問題がある) から 6 点 (非常によい) で総合評価

調査 2: 各自の基準で 10 編の作文を 1 位から 10 位に順位づけし、1 位と 2 位、2 位と 3 位のように隣接する 2 つの作文の順位を決定する際の決め手について自由記述

調査 3: 内容、構成、日本語の各トレイトに属する計 14 の評価項目を提示して評価時に意識した項目を選択し、各項目をどの程度重視したかを 4 段階で回答

(4)本調査: 東南アジアの大学で教える日本語教師に対する調査、ナラティブ作文の good writing の探究

定量的調査

・ 2 種類の課題文 (テーマ「困難 / 大変だったこと」「忘れられない出来事」, 600 字 ~ 800 字) で東南アジア (インドネシア、タイ、ベトナム) の学習者が書いた作文の中から特徴の異なる各 6 編を抽出し、東南アジアの大学で 3 年以上日本語を教え、作文指導の経験がある NT・NNT を対象に、以下の 4 つの調査をオンライン (Google フォーム) および E メール添付 (Excel) によって行った (インドネシア: NNT20 名、タイ: NT20 名、ベトナム: NT12 名、NNT30 名)。

調査 1: 各自の基準で、1 点 (かなり問題がある) から 6 点 (非常によい) で総合評価

調査 2: 各自の基準で各 6 編の作文を 1 位から 6 位に順位づけし、1 位と 2 位の決め手を自由記述

調査 3: 内容、構成、日本語の各トレイトに属する計 15 の評価項目を提示し、作文評価における重視度を「意識しなかった」「あまり重視しなかった」「少し重視した」「重視した」「非常に重視した」から選択

調査 4: 各 6 編を 15 の評価項目ごとに 1 点 (できていない・かなり問題がある) から 4 点 (非常によくできている) でルーブリックによる評価

プロトコル調査

・ 上記調査のうち、調査 1、2 を対面または ZOOM によるオンラインでの実施とし、作文を評価する際に、頭に浮かんだことを発話してもらうプロトコル調査を行った (インドネシア: NT3 名、NNT2 名、タイ: NT2 名、NNT3 名、ベトナム: NT2 名、NNT2 名)。発話データは録音し、すべて文字化した。それ以外の調査は定量的調査同様、E メールでの送付とした。

(5)ナラティブ作文用評価基準・ルーブリックの修正、評価用 FC 作成、FC 点数別サンプル作文抽出

・ 調査の結果からナラティブ作文の good writing について検討した。

・ ナラティブ作文用の評価基準・ルーブリックを修正した。

・ good writing の要素、および、評価の際の重視度の結果を踏まえて評価用 FC を開発した。

・ FC 点数別サンプル作文を選定した。

(6)ナラティブ作文の分析

・ 日本語母語話者、タイ・ハンガリーの日本語学習者が書いた作文についてそれぞれ分析した。

#### 4. 研究成果

(1)ナラティブ作文の収集

対象国であるインドネシア 98 名分、タイ 98 名分、ベトナム 99 名分、および、比較群の日本語母語話者 21 名分、ハンガリー 95 名分の作文を収集した。

(2)予備調査: 日本の大学で教える日本語母語話者教師に対する調査

日本の大学で教える NT20 名を対象に、「忘れられない出来事」というテーマで書かれた作文を用いて、調査 1: 1~6 点の点数による総合評価、調査 2: 10 編の作文を 1~10 位に順位づけし、順位を決定する際の決め手について自由記述、調査 3: 各評価項目の重視度調査を行った。

日本語学習者の書いたナラティブ作文を評価する上で日本語教師が重視する観点、ナラティブ作文の good writing とそうでない作文の特徴について、調査 1、2 の評価結果を調査 2 の自由記述および調査 3 の重視度の結果と照合して分析したところ、評価の観点として、【内容】【構成】【日本語】の中では【内容】が最も重視されており、その中でも、メインポイントが明確であること、課題に沿っていること、主題と出来事の間に一貫性があることが最低限求められることが明らかになった。さらに、good writing と評価されるには、出来事とその出来事に対する心情・評価が具体的に述べられていること、日本語の正確さに大きな問題がないということも求められる。これらを満たし、さらに興味深さがあり日本語が非常に正確な作文は特に優れたナラ

タイプ作文とみなされることが示唆された。

また、日本語のナラティブの上位作文を評価する際、評価者によって重視する項目が異なるのか、異なるとしたらどのような違いがあるのかという点について、調査1の10編の結果をもとに階層型クラスター分析を行った。その結果、4つのクラスター(評価者グループ)に分けられた。各グループの評価者が作文を評価した際の調査2の自由記述を分析し、クラスター間の評価観点の違いを考察したところ、その特徴から各評価者グループはそれぞれ「日本語の正確さ・具体的な描写重視グループ」「厳密な課題達成重視グループ」「曖昧さ・わかりにくさ低評価グループ」「焦点を絞った描写・構成重視グループ」と名付けられた。以上のことから、教師は他の評価者が自分とは異なる観点から作文を捉え、評価やコメントを行う可能性を認識した上で、学習者の作文を評価、指導する必要があることが示唆された。

(3)本調査:東南アジアの大学で教える日本語教師に対する調査、ナラティブ作文の good writing の探求

#### 定量的調査

2種類の課題文によって書かれた作文データ各6編を用いて、東南アジアの大学で教える NT・NNTを対象に、調査1:1~6点の点数による総合評価、調査2:各6編の作文を1~6位に順位づけし、1位と2位の決め手を自由記述、調査3:15の評価項目の重視度調査、調査4:ループリックによる評価項目別評価を行った。

調査3の3つのトレイト【内容】【構成】【日本語】に属する15評価項目の重視度を比較したところ、NT・NNTともに「課題達成」「メインポイントの明確さ」「興味深さ」「一貫性」「心情・評価」といった【内容】の重視度が高いが、【構成】と【日本語】については、複数の項目でNNTによる重視度がより高く、さらに、NNTが全体的に多くの評価項目を重視していた。また、実際の作文評価について調査2の順位づけ評価と1位と2位の決め手の自由記述を用いて分析したところ、NT・NNTともに両課題文で【内容】の「興味深さ」と【日本語】の「正確さ」「困難/大変だったこと」で【内容】の「課題達成」「忘れられない出来事」で【内容】の「出来事の描写」を上位作文の決め手にしていた。一方、NTとNNTの相違として、NTが「困難/大変だったこと」で【内容】の「出来事の描写」「忘れられない出来事」で【内容】の「心情・評価」、NNTが「忘れられない出来事」で【構成】の「順序立て」を上位作文の決め手としていたことがわかった。つまり、ナラティブ作文評価において、NTは【内容】の「興味深さ」と【日本語】の「正確さ」に加え、【内容】の「出来事の描写」を、NNTは【内容】の「興味深さ」と【日本語】の「正確さ」に加え、【構成】の「順序立て」を good writing の要素としていることが示唆された。

#### プロトコル調査

計14名の調査結果から、評価時の Think Aloud で得た音声データを文字化し、日本語教師が作文評価時に意識している項目について、本調査で用いた評価基準をもとにコーディングを行った。コーディング結果の分析は現在行っているところである。

(4)ナラティブ作文用評価基準・ループリック、評価用 FC 作成、FC 点数別サンプル作文抽出

評価基準・ループリックの原案を作成し、その後、調査結果等を踏まえて修正を重ね、完成した。また、これまでの調査結果からナラティブ作文評価時の優先順位を検討し、評価用 FC (ホリスティック評価、マルチプルトレイト評価:内容、構成、日本語の計4種類)初版を作成した。日本の大学で作文授業を担当している NT 6 名に FC 初版を使用してもらって得た意見を参考に修正を加え、最終版を完成させた。さらに、収集した作文データから4種類の FC の点数別サンプル作文をそれぞれ選定した。

(5) ナラティブ作文の分析

#### 日本の大学で学ぶ日本語母語話者のナラティブ作文の分析

日本語母語話者21名によるナラティブ作文(テーマ「困難/大変だったこと」)の特徴・問題点等の分析を行った。その結果、特に評価が低い項目は、【内容】の「過不足ない描写」と「導入部とまとめ」、【構成】の「パラグラフ意識」と「記述量のバランス」であることが明らかになった。【日本語】の「正確さ」においても、一文の長さ、読点の使い方、文のねじれなどによる読みにくさの問題があることがわかった。

作文の分析から課題文による違いがあるのではないかと考え、2種類の課題文(「困難/大変だったこと」「忘れられない出来事」)による評価の違いについても分析した。その結果、各課題文の平均点では【内容】「独創性」「過不足ない描写」、【構成】「バランス」、【日本語】「多様性」

と合計点で「忘れられない出来事」のほうが有意に高かった。同じ課題文内の上位と下位の比較では【内容】「課題達成」「ポイントの明確さ」「一貫性」「過不足ない描写」、【構成】「順序立て」「結束性」「バランス」、【日本語】「正確さ」と合計点で上位作文の点数が有意に高いということが明らかになった。また、両課題文の最高得点の作文をみたところ、「論証型作文に近いもの」「文学的なもの」といった異なるタイプの高得点ナラティブ作文が存在していた。

タイの大学で学ぶ日本語学習者のナラティブ作文の分析

タイ人日本語学習者によるナラティブ作文の日本語能力による違いを明らかにすることを目的とし、タイ人日本語学習者 43 名によるナラティブ作文（テーマ「忘れられない出来事」）を、評価基準を用いて評価項目別に評価した上で、日本語能力（SPOT 得点）に基づいて分析した。その結果、1)「マクロ構成」「パラグラフ意識」「結束性」「記述量のバランス」「多様性」は、日本語能力が高い学習者が書いた作文がより高い評価を得ている、2)「課題達成」「ポイントの明確さ」「一貫性」「順序立て」「スタイル」は全体的に大きな問題はない、3) 上位群にとっても、「過不足のない明確な描写」をし、読者の理解を助ける「導入部と効果的なまとめ」を作成することは容易ではない、あるいは、これらは日本語能力に関係ないものだという可能性がある、4)「独創性」は日本語能力と関係があるわけではない、ということが明らかになった。

ハンガリーの大学で学ぶ日本語学習者のナラティブ作文の分析

日本語能力の違いがナラティブ作文の評価に与える影響を明らかにするため、ハンガリーの日本語学習者が書いたナラティブ作文（テーマ「忘れられない出来事」）の上位群と下位群各 15 編（計 30 編）を【内容】【構成】【日本語】の FC を用いて評価・分析し、日本語能力（SPOT 得点）と作文評価の関係を探った。その結果、上位群・下位群で SPOT の得点には有意差が見られたものの、作文評価点では【内容】【構成】【日本語】すべてにおいて有意差は認められなかった。評価点の得点分布を見たところ、上位群・下位群共に評価点の分布で最も多い点数が重複していた。さらに、SPOT の点数は近いが作文評価点異なる作文を、上位群から 2 編、下位群から 2 編ずつ抽出、精査したところ、日本語能力が高い学習者が書いた作文でも「メインポイントの明確さ」や「結束性」に問題がある事例が見られた。これらが要因となり作文評価点で上位群・下位群に有意差が認められなかったと推察される。

#### (6) ウェブサイト公開

ナラティブ作文用評価基準・ルーブリック、評価用 FC、評価の理由説明を付けた FC 点数別サンプル作文をウェブサイト「Narrative Writing：日本語のナラティブ作文評価のための支援ツール」に公開した。 <https://narrativewriting20.wixsite.com/home>

#### (7) セミナー実施

評価用 FC を用いて以下のセミナー・ワークショップ、口頭発表を行った。

ベトナム：「ナラティブ作文の評価を考える フローチャートの活用」

ハノイ日本語教師会セミナー（2023 年 3 月 4 日）、フエ外国語大学（2023 年 3 月 6 日）

タイ：口頭発表「ナラティブ作文評価用のフローチャート・評価基準の開発 - アンケート結果を踏まえた活用の可能性 -」第 1 回タイ国日本語教育国際シンポジウム（2024 年 3 月 9 日）

日本：研究会セミナー「日本語ライティングにおけるナラティブ作文の評価と教育：フローチャートを用いて」第 62 回アカデミック・ジャパニーズ・グループ定例研究会（2024 年 6 月 15 日）

#### < 引用文献 >

国際交流基金（2017）『海外の日本語教育の現状 2015 年度日本語教育機関調査より』  
[http://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey\\_2015/all.pdf](http://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey_2015/all.pdf)（2024 年 6 月 9 日閲覧）

田中真理・阿部新（2014）『Good writing へのパスポート 読み手と構成を考えた日本語ライティング』くろしお出版

田中真理・坪根由香里・佐々木藍子・影山陽子・阿部新（2018）「ライティング評価におけるフローチャートの開発：評価の一致を目指す場合」、Book of Abstracts, Venezia ICJLE 2018 平和への対話、289-290.

田中真理・長阪朱美・成田高宏・菅井英明（2009）「第二言語としてのライティング評価ワークショップ 評価基準の検討」、『日本語教育論集 世界の日本語教育』19 号、157-176、国際交流基金。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 影山陽子・坪根由香里・数野恵理・トンプソン美恵子	4. 巻 13
2. 論文標題 プロンプトによるナラティブ作文の評価の違い 高得点を得た「よいナラティブ」の提示	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル	6. 最初と最後の頁 27-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坪根由香里・数野恵理・トンプソン美恵子・影山陽子	4. 巻 12
2. 論文標題 日本人大学生が書いたナラティブ作文の評価 日本語ナラティブ作文用の評価項目を用いて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語/日本語教育研究	6. 最初と最後の頁 229-244
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 数野 恵理・影山 陽子・トンプソン 美恵子・坪根 由香里	4. 巻 5
2. 論文標題 日本語母語話者教師が考えるナラティブ作文のGood Writing：評価の際に重視された項目より	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語・日本語教育 = Journal of Japanese language and Japanese language teaching	6. 最初と最後の頁 1～22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14992/00021381	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坪根由香里・トンプソン美恵子・影山陽子・数野恵理	4. 巻 21
2. 論文標題 第二言語としての日本語ナラティブ作文の評価基準とルーブリックの開発	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大阪観光大学紀要	6. 最初と最後の頁 85-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 坪根由香里・影山陽子	4. 巻 1
2. 論文標題 ナラティブ作文の評価に関する探索的研究 タイ人日本語学習者を対象として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 タイ日研究ネットワークThailand研究論集	6. 最初と最後の頁 46-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坪根 由香里・トンブソン 美恵子・影山 陽子・数野 恵理	4. 巻 25
2. 論文標題 日本語母語話者教師による日本語ナラティブ作文の評価観点の違い クラスタ分析の結果から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 214 ~ 229
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.19024/jajls.25.1_214	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 トンブソン 美恵子・影山 陽子・坪根 由香里・数野 恵理	4. 巻 183
2. 論文標題 日本語母語話者教師・非母語話者教師がナラティブ作文評価で重視する項目 評価項目の重視度比較と順位決め自由記述の分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語教育	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 数野恵理・影山陽子・坪根由香里・トンブソン美恵子
2. 発表標題 日本語学習者が書いたナラティブ作文におけるgood writing 日本語母語話者教師は評価時にどのような項目を重視するのか
3. 学会等名 第57回 日本語教育方法研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 トンプソン美恵子・影山陽子・坪根由香里・数野恵理
2. 発表標題 日本語母語話者教師・非母語話者教師はナラティブ作文評価でどのような項目を重視するか 重視度調査と上位作文に対するコメントの分析を通して
3. 学会等名 第55回アカデミック・ジャパニーズ・グループ定例研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 坪根由香里・数野恵理・影山陽子・トンプソン美恵子
2. 発表標題 東南アジアの大学で教える日本語教師によるナラティブ作文の評価 総合評価と項目別評価の結果から
3. 学会等名 タイ国日本語教育研究会第34回年次セミナー
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 坪根由香里・数野恵理・トンプソン美恵子・影山陽子
2. 発表標題 日本人大学生が書いたナラティブ作文の評価 日本語ナラティブ作文用の評価項目を用いて
3. 学会等名 日本語教育学会2020年度秋季大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 影山陽子・坪根由香里・数野恵理・トンプソン美恵子
2. 発表標題 プロンプトによるナラティブ作文の評価の違い - タイプの異なる「よいナラティブ」の提示 -
3. 学会等名 第52回アカデミック・ジャパニーズ・グループ定例研究会
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 坪根由香里・トンプソン美恵子・影山陽子・数野恵理
2. 発表標題 第二言語としての日本語ナラティブ作文に対する日本語母語話者教師の評価観点 good writing の評価はどう異なるか
3. 学会等名 早稲田大学日本語教育学会 2021 年春季大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 坪根由香里・影山陽子
2. 発表標題 ナラティブ作文の評価に関する探索的研究 - タイ人日本語学習者を対象として -
3. 学会等名 タイ日研究ネットワークThailand国際シンポジウム2019
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 影山陽子・坪根由香里・数野恵理・トンプソン美恵子
2. 発表標題 ハンガリーの日本語学習者が書いたナラティブ作文の評価 - 上位群と下位群の比較から -
3. 学会等名 第 26 回 AJE ヨーロッパ日本語教育シンポジウム / 第17回ヨーロッパ日本研究協会国際会議日本語教育部門 (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>ウェブサイト 「Narrative Writing 日本語のナラティブ作文評価のための支援ツール」 <a href="https://narrativewriting20.wixsite.com/home">https://narrativewriting20.wixsite.com/home</a></p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	数野 恵理  (Kazuno Eri)  (00552366)	立教大学・日本語教育センター・特任准教授    (32686)	
研究分担者	トンプソン 美恵子(平野美恵子)  (Thompson Mieko)  (20401606)	東京大学・大学院総合文化研究科・准教授    (12601)	
研究分担者	鈴木 陽子(影山陽子)  (Suzuki Kageyama Yoko)  (60366804)	日本女子体育大学・体育学部・准教授    (32671)	削除：2019年11月28日

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関